

平成 25 年度第 3 回宇都宮大学経営協議会議事要録

日 時 平成 25 年 12 月 17 日 (火) 15 時 00 分～17 時 00 分
場 所 宇都宮大学本部第一会議室
出 席 者 進村, 飯村, 板橋, 関根, 橋本, 浜村, 森, 築, 石田, 井本, 茅野, 加藤, 田巻,
藤井の各委員
伊藤監事, 吉田監事, 塚本副学長, 佐々木学長特別補佐

議事に先立ち, 平成 25 年度第 2 回宇都宮大学経営協議会議事要録 (案) を確認し, 原案のとおり承認した。

[議 題]

1. 中期目標・中期計画の変更について (案) 資料 1
石田理事から, 資料 1 に基づき, 中期目標・中期計画の変更 (案) について説明があり, 審議の結果, 原案のとおり承認した。
2. 学内規程等の一部改正について
 - (1) 国立大学法人宇都宮大学職員給与規程の一部を改正する規程 (案) 資料 2-1
加藤理事から, 資料 2-1 に基づき, 国立大学法人宇都宮大学職員給与規程の一部を改正する規程 (案) について説明があり, 審議の結果, 原案のとおり承認した。
 - (2) 国立大学法人宇都宮大学職員就業規則の一部を改正する規則等 (案) 資料 2-2
加藤理事から, 資料 2-2 に基づき, 国立大学法人宇都宮大学職員就業規則の一部を改正する規則 (案) 及び国立大学法人宇都宮大学再雇用職員就業規則の一部を改正する規則 (案) について説明があり, 審議の結果, それぞれ原案のとおり承認した。

[報告事項]

1. 平成 25 年度補正予算 (第 1 号) について 資料 3
学長から, 資料 3 に基づき, 平成 25 年度補正予算 (第 1 号) について報告があった。
2. 「国立大学改革プラン」及び「学長メッセージ」について 資料 4-1, 4-2
学長から, 資料 4-1 に基づき, 平成 25 年 11 月 26 日に文部科学省が公表した「国立大学改革プラン」の概要, 及び資料 4-2 に基づき, 同プランの公表を受けた本学の「学長メッセージ」についてそれぞれ報告があった。
3. 大学COCキックオフシンポジウムの開催について 資料 5
学長から, 資料 5 に基づき, 大学COCキックオフシンポジウム「未来をデザインする力を育む宇都宮大学へ ～学生がとちぎの高齢社会を学ぶ意味～」を開催する旨の報告があった。
4. 平成 24 年度に係る業務の実績に関する評価の結果について 資料 6
石田理事から, 資料 6 に基づき, 平成 24 年度に係る業務の実績に関する評価の結果について報告があった。

5. 中期計画期間（平成 22～27 年度）の進捗状況について 資料 7
石田理事から、資料 7 に基づき、中期計画期間（平成 22～27 年度）の進捗状況について報告があった。

6. 2013 年度全国大学地域貢献度調査（日経グローバル）の結果について 資料 8
石田理事から、資料 8 に基づき、2013 年度全国大学地域貢献度調査（日経グローバル）の結果について報告があった。

7. 財務レポート 2012 について 資料 9
財務課長から、資料 9 に基づき、財務レポート 2012 について、9 月末に文部科学大臣の承認を得て公表した旨の報告があった。

（主な意見等）

- ・財務レポートの配布先はどこか。
（→取引銀行や同窓会等へ配付している。）
- ・財務レポートが広く認知されていない感がある。財務レポートの存在を広く知ってもらうチャンスを作るべきである。
（→約 400 部作成しており、公式ホームページにも掲載して公表している。）
- ・すばらしい資料であり、地元の企業との連携にも結びつくので、財務レポートを栃木県経済同友会事務局へも送付してほしい。

8. その他

参考資料

学長から、参考資料に基づき、本学関連の新聞掲載記事について紹介があった。

机上配付資料

石田理事から、机上配付資料に基づき、大学の取組等を紹介する雑誌等に掲載された本学関連記事について報告があった。

[意見交換]

1. 宇都宮大学の教育研究活動等への取組について 資料 10～11

井本理事から、宇都宮大学における教育研究活動等への取組を紹介させていただき、意見等を賜りたい旨の説明があり、「UU-COE の研究内容及び成果」について、児玉教員（バイオサイエンス教育研究センター）及び諸星教員（工学研究科）から発表があった。

（主な意見等）

- ・非常に分かりやすく報告いただきすばらしい。外部の研究施設と提携して研究を進めるなどしたら、さらに成果が高まるのではないか。研究内容についても、積極的に学外へアピールすれば良いのではないか。
（→学会等で活発に発表しており、個別でも学外の研究者等と共同で研究を進めている。）
- ・研究プロセスで「魔の川」（基礎研究と技術開発の間）と「死の谷」（技術開発と実用化の間）を越えるということは何となく分かるが、「ダーウインの海」（実用化と産業化の間）を越える難しさということについて、どのように実感されているか。
（→大学の研究というよりは、企業が確立したものが浸透していく過程であると理解している。そういう意味で時間がかかるのではないか。大学でできることは、実用化のところまでかと考える。）
- ・実用化から産業化に持っていくためには企業の力が必要であり、実用化を推進するノウハウ

ウを持った人材がいないと、研究者では手に負えないのではないか。
(→今回の UU-COE では、産業化のところまでは手が負えないので、実用化までを目標にして研究を進めている。)

- ・分かりやすく勉強になった。今、総合科学技術会議の第4期の基本計画が動いており、見方が大分変わってきた。出口からみた科学技術がどうあるべきかということが色濃く問われてきている。ダーウィンの海を越えた先にどんな社会的・経済的価値を生み出すかということを見据えた形でみている。これまでは、基礎研究から実用化までのリニアモデルが主流になっていたが、逆リニアモデルから考えると、どういう風に基礎研究があるべきなのかということが議論されている。これをどうやって基礎研究をやっていくかを見据えて研究を進めれば、資金獲得にもつながるのではないか。社会に貢献するということが色濃く問われるようになってきている。

ダーウィンの海を越えるためには、社会科学系等の必要な学問と一緒に研究を進められると、すばらしい成果につながるのではないか。

(→学内の農業経済の先生と交流しているが、今後、積極的に連携を進めていきたい。)

- ・この技術の最終的な顧客は誰なのかということである。そういうところへどうやって情報を発信していくかの視点も必要。マーケティングがないとビジネスまでにはいかない。その辺も取り込んでいけば良いのではないか。
- ・地域貢献度のポイントを高めるためにも大学発ベンチャーを活発にしたら良いのではないか。実用化に向け、プロジェクトを立てて育てようとする視点で進めたら良いのではないか。
- ・iPS細胞の場合と同じように、もっとオープンにしていったら良いのではないか。
- ・本日の新聞に、文部科学省が海外とのジョイントディグリーの記事掲載があった。締結にあたっての大学間のレベルの問題に関する記事が掲載されていたが、そういう時代にあつて、学部の授業レベルの問題への意識が必要となる。
また、入試が改革されるということになると、高等学校や中学校への影響があり、長期的にこれらの問題に対応すべく、遅れないように体制づくりを進めていただきたい。

学長から、次回の経営協議会開催予定について次のとおり案内があった。

日 時	平成 26 年 3 月 25 日 (火) 15 時から
場 所	市内ホテルを予定
主な議題	平成 26 年度年度計画 (案) , 平成 26 年度宇都宮大学予算 (案)

以 上